

【報告】**成人看護学における看護過程演習の遠隔授業による展開**

乾 友紀¹⁾ 大山 末美¹⁾ 氏原 恵子¹⁾ 兼子 夏奈子¹⁾ 藤浪 千種¹⁾
河野 貴大¹⁾ 寺田 康祐¹⁾ 伊東 千世子¹⁾ 長山 有香理¹⁾ 本田 彰子¹⁾
大石 ふみ子¹⁾

1) 聖隷クリストファー大学看護学部

Development of an Online Nursing Process Seminar in Adult Nursing

Yuki Inui¹⁾ Suemi Oyama¹⁾ Keiko Ujihara¹⁾ Kanako Kaneko¹⁾ Chigusa Fujinami¹⁾
Takahiro Kono¹⁾ Kousuke Terada¹⁾ Chiseko Ito¹⁾ Yukari Nagayama¹⁾ Akiko Honda¹⁾
Fumiko Oishi¹⁾

1) School of Nursing, Seirei Christopher University

《抄録》

本学看護学部の成人看護学における3年次春semester必修科目「成人看護援助論演習」では、主体的学修を基盤とする協働学修を取り入れた看護過程演習を実施している。2020年度においては、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）拡大により、面接授業が困難となり、遠隔授業による実施を迫られた。本稿では、短期間で修正した具体的な教育の実践内容およびその過程で生じた課題や対応策等について報告した。看護過程演習では、オンデマンド授業を主体に一部同時配信授業を取り入れ、学習管理システム（Learning Management System）を活用し、学生の提出課題へ教員が個別に対応しながら、学修過程を支援した。新型コロナウイルス感染症の収束の兆しが見えない中（2020年12月現在）、今後さらに情報通信技術を活用した学生への効果的・効率的な教育方法の在り方を検討していくことが課題である。

《キーワード》

成人看護学、看護過程、演習、遠隔授業

I. はじめに

2020年における世界的な新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の拡大、全国における感染者の急激な増加は、大学教育へも多大な影響を及ぼした。2020年3月には、大学等の授業の開始について、面接授業に代わり、多様なメディアの高度な利用などを通じて、教室外の学生に対して行う授業（以下、遠隔授業）の活用について、文部科学省より通知がなされた（文部科学省，2020a）。2020年4月の文部科学省報告によれば、大学等における授業開始時期の延期は全体の88.7%（713校）であり、遠隔授業を実施または検討する方針である大学等が98.7%（793校）とされている（文部科学省，2020b）。さらに、2020年5月20日時点における授業の実施方法は90.0%（778校）において、遠隔授業のみの実施であり、面接授業のみあるいは面接・遠隔授業を併用している大学は9.9%（86校）と1割未満に留まった（文部科学省，2020c）。この時期を振り返ると、短期間のうちに本邦のほぼ9割に及ぶ大学等が遠隔授業への対応を迫られ、感染予防を図りながらも学生の学修機会を確保する方法を模索していたことが窺える。本学においても、2020年度春semesterの開始が延期され、2020年4月20日より遠隔授業が開始された。全学的には情報通信技術（Information and Communication Technology: ICT）を活用した教育が推進されつつあったものの、慣れない遠隔授業の開始に伴い、すべての教職員が多様な方法を模索しながら教育を展開する必要が生じた。このような状況下において、成人看護学の科目である「成人看護援助論演習」では、短期間に従来の授業計画を修正し、教育方法を検討しつつ授業を実施することとなった。実際に展開された遠隔授業の中で、主に看護過程に関する演習の展開に焦点を当て、以下にその実践を報告するとともに、今

後の課題を検討する。

II. 「成人看護援助論演習」における看護過程演習の概要と授業計画

1. 看護過程演習の概要

本科目「成人看護援助論演習」は3年次生春semesterにおける必修科目として、1単位30時間15コマで構成され、このうち1～9回を看護過程演習と設定している。本科目の位置づけは、「看護専門分野や諸学の学識を用いて課題を探求し、多面的に考察することができる」こととし、専門基礎領域や看護専門領域における既習の学修内容を活かしながら、紙上事例の看護過程展開による統合的な学修を推進している。看護過程演習の目的は、「紙上事例を通して健康障害をもつ成人に関する情報を整理し、情報の解釈・分析・統合により看護上の問題を明確にし、優先度を考えた看護計画の立案ができる」である。また、目標として「1. 看護過程、看護診断に関わる基本的知識を理解できる 2. 紙上事例から系統的に情報を整理できる 3. 情報を解釈・分析・統合し、看護上の問題を明確化できる 4. 看護上の問題を解決するための個別で具体的な看護計画を立案できる」の4点を掲げている。系統的・科学的な看護の実践のためには、看護過程を基本とした思考能力の向上が必要であり、3年次秋semesterより臨地実習を控える学生にとって、本科目は重要な位置づけにある。これらを背景に、本演習は2019年度より学生の主体的学修を基盤とした協働学修を企画・実施し、ICTを活用しながら学生相互に学び合える仕組みを設計している。2020年度における本科目の履修者数は169名であり、学生の教育・指導に関わった教員は10名（非常勤含む）であった。

2. 看護過程演習における従来の授業計画

看護過程演習における従来の授業計画（従

来案)の具体的内容を表1に示す。全9回の看護過程演習のうち、3回は講義、6回は協働学修として企画した。

講義では、オリエンテーションや紙上事例の説明、事前学修として提示した課題達成度の評価を目的としたミニテストを含み、講義内容は看護過程の概要から各過程における説明を、分析例などを交えながら企画した。なお、本演習では「人工膝関節全置換術を受ける患者の看護」をテーマとした周術期における患者事例を用いた。

また、協働学修では、全体を6グループ(1グループ34名)に分け、それぞれに担当教員を配置し、協働学修の技法を活用したアクティブラーニングを企画した。例えば、第3・4回では、一人で考える(think)ことや、パートナーとなった学生と話し合い、自分と他者の理解を比較し照らし合わせる(pair)(share)というThink-Pair-Shareと、ペアの学生同士のインタビューから他のペアへ報告をし合うThree-Step Interviewにより、患者情報から導き出した看護問題や相互の関連性について関連図をもとに共有し、学び合えるよう企画した。さらに、第5・6回、第7・8回では、考えられる看護問題を導き出したうえで、34名をさらに6グループへ細分化し、各グルー

プが1つの看護問題を担当したうえで、看護問題を明確化するための重点的なアセスメントを行うこと(第5・6回)および看護計画を立案すること(第8・9回)を課題として設定した。これらをもとに、グループワークの結果を報告する技法として、Poster Sessionを取り入れ企画した。本演習における協働学修の技法はBarkley et al (2005/2017)を参考にした。各回では、次回までの課題として、学修課題や看護過程のステップに応じた紙上事例の分析を提示し、これらを事前・事後学修として位置づけながら、協働学修へ活用することを想定した。また、これらの授業計画は、会議等を通じて内容の協議・検討を進め、教授法を統一するための授業マニュアルを作成し、担当教員間の打ち合わせを実施し、共有を図った。

Ⅲ. 遠隔授業の開始に伴う授業計画の修正

上記に示した2020年度の看護過程演習における従来案は、協働学修を基盤としたアクティブラーニングを中心に据えていたため、新型コロナウイルス感染症の拡大によって、面接授業が果たせなくなったことによ

表1. 看護過程演習における従来案の内容

回	内容	協働学修の技法	事後学修(次回までの課題)
1	【講義】 ・オリエンテーション ・看護過程とは・アセスメントとは(1) ・紙上事例について		・事前学修課題の学修 ・不足部分の学修 ・講義内で提示した事例についてデータベース作成、 系統的アセスメントの一部
2	【講義】 ・事前学修課題に関するミニテスト ・アセスメントとは(2)		・事例分析：データベース作成、系統的アセスメント、 関連図作成
3・4	【協働学修】 ・関連図を用いた情報の統合、 「考えられる看護問題」の抽出	・Think-Pair-Share ・Three-Step Interview	・事例分析：重点アセスメント
5・6	【協働学修】 ・重点アセスメントによる看護問題の明確化	・Poster Session	・事例分析：重点アセスメントの続き
7	【講義】 ・看護計画の立案と評価		・事例分析：看護計画
8・9	【協働学修】 ・看護計画の立案	・Poster Session	・最終レポート提出準備
			・最終提出 看護過程演習レポート

り、授業方法を大幅に修正する必要が生じた。本学では2020年度より学習管理システム（Learning Management System: LMS）であるWebClass（日本データパシフィック株式会社）（以下、LMSとする）の導入が決定していたため、このLMSの活用に関する研修会も多く開催されており、遠隔授業への移行に伴う活用を期待できた。また、同時配信授業を行うためのWeb会議システムとして、本学では全学的な運用はZoom（Zoom Video Communications, Inc.）を想定し整備された。感染拡大状況に伴い、教育機関として対応が随時迫られる中、このようなツールを活用した遠隔授業の導入準備が進んだ。一方では、教員がICTツールを習熟することや、情報共有の機会を確保する時間を充分に得られないまま、短期間で遠隔授業へ対応せざるを得ない状況にあった。

以下に、具体的な授業計画の修正（修正案）について述べる。

1. 目的・目標の検討

最初に、目的・目標の内容について検討した。本演習は秋semesterの領域実習につながる重要な演習であり、看護過程を展開する学修経験は必要不可欠であると考えた。したがって、目的・目標の設定については従来計

画通りとし、以下に示す授業構成や授業方法を見直すことで、学生が目標到達に近づけることを目指し、教育方法を検討した。

2. 授業構成に関する修正

第1～第9回の授業は準備期間が限られていたことから、大枠の変更をせず従来通り行うこととした。従来案では本演習を実施する前提として、学生の十分な事前・事後学修を想定していたが、遠隔授業への移行に伴う学生の慣れない学修環境や学修形態への適応の困難さが生じること、他領域の授業科目とも並行して課題が増加し負担が増すことが予測された。そのため、9回分の学修内容や課題量を調整し、授業構成を表2のとおり修正した。

第1・2回は従来案の計画通り、講義とした。第3・4回は当初、関連図を基にした協働学修を予定していたが、この協働学修を行うには、データベース作成、系統的アセスメントおよび関連図の作成が事前学修として前提になり、学生の負担が増加することが考えられたため、まずデータベース作成、系統的アセスメントを第3・4回のテーマとして取り上げた。そのうえで第5・6回のテーマを、【関連図を用いた情報の統合および「考えられる看護問題」の抽出】とし、第7・8回のテーマ

表2. 看護過程演習における修正案の内容

回	内容	授業配信方法等	提出物（LMSへ）	事後学修（次回までの課題）
1	【講義】 ・オリエンテーション ・看護過程とは・アセスメントとは（1） ・紙上事例について	・同時配信 ・オンデマンド	・リアクションペーパー	・事前学修課題の学修 ・講義内で提示した事例についてデータベース作成、系統的アセスメントの一部
2	【講義】 ・前回の課題の解説 ・アセスメントとは（2）	・オンデマンド	・リアクションペーパー ・事前学修課題に関するミニテストの受講	・不足部分の学修
3・4	【オンラインによる課題の取り組み】 ・データベース作成、系統的アセスメント	・LMS	・事例分析：データベース、系統的アセスメント	・分析内容に関する解説および分析例、教員から返却されたコメントを確認後、分析内容の修正
5・6	【オンラインによる課題の取り組み】 ・関連図を用いた情報の統合、 「考えられる看護問題」の抽出	・LMS	・事例分析：関連図	・関連図に関する解説及び分析例、教員から返却されたコメントを確認後、関連図の修正
7・8	【オンラインによる課題の取り組み】 ・重点アセスメントによる看護問題の明確化	・LMS	・事例分析：看護問題の重点アセスメント	・分析内容に関する解説および分析例、教員から返却されたコメントを確認後、分析内容の修正
9	【講義】 ・看護計画の立案と評価	・オンデマンド	・リアクションペーパー	・最終レポート提出準備 (これまでの看護過程内容の修正を反映させ、さらに看護問題の重点アセスメントを追加し、完成)
			・最終提出 看護過程演習レポート	※ 二重枠は従来案から変更した構成部分である

マを「重点アセスメントによる看護問題の明確化」とした。当初は第9回までに看護計画を立案する協働学修を実施する構成としていたが、修正案では看護計画に関する講義までとし、具体的な看護計画の立案は、3年次春 Semester に同時並行で実施される成人看護系の科目と連携し、補完することで調整した。

3. 授業方法に関する修正

これらの授業構成を再設計しつつ、授業方法に関して検討した。授業方法における課題と対応策等は表3に示した。

まず、講義を実施するうえで、オンデマンド授業あるいは同時配信授業等をどのように採用するか決定する必要がある。留意事項として、Wi-Fi環境を有していない学生の通信量の負担軽減や自宅にパーソナルコンピューター（以下、PC）を保有していない学生への配慮が挙げられた。本科目では、これらを鑑み、初回のオリエンテーションを一部同時配信授業とし、その他の講義はすべてオンデマンド授業を採用することとした。ただし、本科目はすべての回につながりがあること、課題を取り組む第3・4回、第5・6回、第7・8回では、学生同士および学生教員間の

意見交換の時間を設けることを企画したことから、オンデマンドであっても可能な限り授業時間割通りの受講を求め、さらに計画的な課題の取り組みが受講の姿勢として必要であることを学生へ説明することとした。オンデマンド授業は、すべて Microsoft Power Point (Microsoft) の授業スライドへ音声を録画した教材（1セッション約10～20分）を、1講義につき2～3セッションで構成し、LMSへ提示した。

また、別の留意事項として、LMSへ動画教材および授業資料を提示する際の著作権の取扱いが挙げられた。これについては、2020年4月28日より授業目的公衆送信補償金制度が開始され、教育機関の設置者が指定管理団体（一般社団法人 授業目的公衆送信補償金等管理協会：以下、SARTRAS）へ一定額の補償金を支払うことにより、本制度の利用が可能となったこと、さらに2020年度に限り、暫定的にこの補償金が無償化されることが決定した（文化庁、2020）ことから、当該年度におけるこの問題は解決した。

次に、従来案で協働学修を計画していた回（修正案では第3・4回、第5・6回、第7・8回）の授業方法を検討した。今回はICTツール

表3. 授業方法に関する課題と対応策等

課題	対応策等
Wi-fi環境の未設定（通信量の増加）	オンデマンド授業の配信、LMS活用
PCの未保有	看護過程記録用紙や授業資料の郵送配布
オンデマンド授業配信による受講時間等の不統一	講義・演習の流れを周知、時間割通りの受講を求める
LMSへの教材提示による著作権取り扱い	授業目的公衆送信補償金制度の制度化・無償化
オンライン上のグループワーク活動	ICTツールを活用した学生同士の意見交換
教員との関わりの不足	LMSを通じた掲示板の立ち上げ 掲示板への質問の書き込み/回答・意見交換
課題内容へのフォローアップ	分析例の一部や解説をLMSへ提示 担当教員による課題添削とフィードバック メールによる個別対応

やWeb会議システムの多様な機能を駆使するまでには至らず、オンライン上でのグループワーク活動の推進は断念し、提示した課題に学生自身が取り組み、LMSへ課題を期限内に提出する方法とした。ただし、学生間ではICTツールを活用しながら、各回の分析内容について意見交換を行うよう促すこととした。学生へは、コミュニケーションを取る際の留意点として、効果的な学修ができるよう準備すること（事前学修等を十分に行う）、質問する場合は自分の考えを述べてから行うこと、間違っても構わないこと、相手の意見も尊重すること等を説明することとした。全ての回では、LMSへスレッドフロート型掲示板を立ち上げ、学生からの意見や質問に対し、教員が主に授業時間（場合によっては授業時間外にも対応）に回答し、双方向性を確保できるようにした。また、課題提出期限の翌週には科目責任者からLMSを通じて課題内容における一部の分析例や解説を提示することとした。そのうえで、成人看護学領域の教員が1名あたり16～17名の学生を担当し、課題内容を添削後、LMSを通じて各学生へフィードバックすること、必要時はメール等によって個別対応することを計画した。

なお、課題はLMSへの提出を前提としたが、前述のとおり、スマートフォンは保有しているが自宅にPCを保有していない学生も一定数見受けられ、PCを使用した看護過程の分析ができないことが想定された。そのため、看護過程の記録用紙や授業資料は全学生へ郵送配布とした。PCへ入力できない場合は記録用紙へ直接手書きし、記録した用紙をスマートフォン等で写真に撮り、メール添付したうえで担当教員へ提出する方法も同時に採用した。

4. 成績評価に関する修正

成績評価について、従来案では主に看護過程演習の最終レポート（看護過程の展開）に

配点の重点を置き、協働学修への参加度、ミニテストによる事前学修課題の評価等の総計で評点を算出する計画であった。修正案では、事前学修課題のミニテストの配点を減らし、授業後のリアクションペーパー等を用いた採点を追加した。さらに、学生同士や学生と教員の接する機会が減ることから、課題の取り組みを通して、教員のフィードバックの頻度を多くすることとし、課題提出に伴う加点と最終レポートとする看護過程の分析内容をループリックによって評価し、これらを総計して演習における成績評価とした。

IV. 遠隔授業による看護過程演習の実際

これらの修正案をもとに、3年次春 Semester「成人看護援助論演習」における看護過程演習として、2020年度4～6月に第1～9回を実施した。以下に、看護過程演習の実際、学生の学修内容および目標達成状況について述べる。

1. 看護過程演習の実際

全169名の履修生のうち、やむを得ない理由を有する1名を除く168名が看護過程演習を終えることができた。初回のオリエンテーションでは、同時配信授業を一部行い、看護専門領域である成人看護学における本科目の位置づけや科目概要、到達目標、本科目に必要な姿勢等を説明した。以降、講義はオンデマンド授業へ切り替えたが、LMSへの学生のアクセスは良好であり、設定時間に沿った受講や、リアクションペーパー等の期限までの提出は、ほぼ全員ができた。一部の学生に、通信環境の問題から生じる映像や音声トラブルが発生していたが、大きな問題には至らなかった。また、学生によるLMSの掲示板への書き込みやリアクションペーパーに寄せられた質問や意見、メールによる質問に対

しては、学生の不安や疑問を解消するよう内容を集約し、科目責任者からできるだけ早期に回答をLMS上へフィードバックした。また、授業の進行に伴い生じた、授業内容の変更点や連絡事項に関しては、随時LMS上の「タイムライン」（授業の指示や資料を載せるなどして共有できる機能）へ内容を提示するようにした。

第3・4回、第5・6回、第7・8回のオンラインによる課題の取り組みでは、学生からの意見や質問を各回の設定時間に担当教員専用のLMS掲示板へ書き込むよう促し、それらに対し、担当教員がタイムリーに回答した。提示された課題は、ほぼ全員がすべての回において提出期限内に学修成果物として提出できた。課題は担当教員が内容を添削し、期限内にそれぞれコメントを添え、LMSあるいはメールによるフィードバックを行った。記録用紙の手書きを選択したものは各回によって異なったが、2～3割ほどであり、PCを使用できない環境にある者に加え、PCに不慣れな者が手書きによる記録を選択していたケースも見受けられた。

2. 学生の学修内容および目標達成状況

課題の取り組みを通して学生の学修内容をみると、これまでの授業内容を反映させ、知識を補いながら、努力して学修過程を進めている様子が窺えた。学生は、課題提出後にはLMSへ分析例や解説が提示されたため、それらの内容を自己の分析内容と照合し、学生自身が理解度を確認していく作業ができていた。また、課題内容について教員のフィードバックを受け、それらを基に課題を修正していくとともに、最終的にはすべてを整え課題を提出できていた。自主的に学修を推進できた学生が多く認められた。

紙上事例による看護過程の展開を実施したことについては、アセスメントの視点の難しさや関連図作成などが困難であった様子が窺

えたが、患者の看護問題を的確に抽出し、個別的な看護を実践するためには、看護過程の思考が重要であることの理解が促進されていた。

一方では、これまでの学修形態に十分適応できず、全体的な理解不足が目立ち、看護過程の分析に苦慮する学生も見受けられ、個々の学修内容の差が課題内容に反映された。

本科目終了後の授業に関するアンケートでは、授業の到達目標を達成することができたかを問う質問において、98%（回答者全119名中114名）が「そう思う」「ややそう思う」と回答していた。

V. 考察

今回、「成人看護援助論演習」における看護過程演習では、時間的制約の中で遠隔授業へ授業計画を修正し実施した。異例の事態の中、できる限りの対応や対策を講じてきたが、指導を担当した教員にも、学生へ効果的な学修機会を提供できているか不安があった。また、何より学生自身も慣れない学修環境の中、受講することの不安や期限内に課題に取り組み、成果物として提出を課された状況に焦りなどもあったであろう。学生からのアンケートでは、目標達成できたかの問いに9割以上が「そう思う」「ややそう思う」と答え、良好な結果であったと考えられるが、今回実施した教育内容を再度省察することは、今後の看護教育をより向上させるために必要であると考えられる。以下に、本演習の振り返りを考察するとともに、今後の課題と展望を述べたい。

1. 遠隔授業による授業方法と学修の質向上のための方策

本演習の遠隔授業の形態としては、初回のオリエンテーション時に同時配信したのみで、ほぼオンデマンド形式の授業を採用した。オ

ンデマンド授業の場合、いつでも受講可能であるのが一つのメリットではあるが、今回はできる限り時間設定どおりの受講を求め、授業のつながりを意識し、学生の学修過程が途切れないように努めた。オンデマンド授業とした理由は、学生の通信量の負担を減らすためであったため、これらの問題が解決すれば、同時配信授業を実施することや同時配信授業とオンデマンド授業の併用を試みることは有用であると考えられる。遠隔授業では、その受講生の反応が十分には把握できないという特徴があり（小池，2002）、オンデマンド授業では「通常は周りに人はいなく孤独であるから、誰かが見守っていてくれるという意識がなければ長続きしない」（開原ら，2012）と述べられている。このように、「受講生のモチベーションを維持すること」は一つの課題として挙げられる。このデメリットへの対応として、今回は教員のフォローアップの頻度を増やし、複数の学生と教員との双方向性の機会を設けた。このことはほぼ全員の学生の継続した受講にもつながったと考えられる。一方では、第3・4回、第5・6回、第7・8回において担当学生16～17名の課題を評価し、フィードバックしたことについては、個別対応を取らざるを得ず、担当教員の負担は全体的に増加した側面もあった。したがって、教員個々の過度な負担を避ける工夫も必要であると考えられた。また、同時配信授業では、リアルタイムな学生と教員とのやり取りが可能となるが、通信トラブル等が生じないよう技術的なサポート要員の確保も必要である。このような各々のメリット・デメリットおよび注意点を踏まえたうえ、どのような手法を活用することが学修目標の達成に効果的かを軸に据え、授業方法を検討する必要がある。

また、今回学生とのコミュニケーション手段はLMSにおける掲示板およびメールを基本とし、提出された課題内容から各学生の学

修進度を推し測ってきた。これは、学生個々が看護過程の分析に取り組む中において、どこまでを理解し、どのようなことに悩んでいたのか、具体的な生の声を把握しにくい状況が生じていたと思われる。学生同士で情報や意見を交わし合うことを推進したが、すべての学生が有効的な意見交換ができたとは限らない。コロナ禍にある社会状況をも考慮しながら、学生自身の心理的な負担や精神状況にも配慮し、細やかなフォローが重要であった。また、本科目に関わった教員数は複数であり、遠隔授業によって学生個々への対応が必要となったことから、さらに教員間の情報共有や連携を図り、学生をフォローアップしていく体制を充実させていくことが必要であると考えられる。教員間では、LMSを通して学生への指導内容を相互に把握でき、今後の実習へも反映できたという意見も認められた。

また、今回、遠隔授業であることを考慮し、従来案を一部削除（表1 従来案の第8・9回分を削除）し、課題量の修正を諮ったことは適切であったと考えられる。この削除部分は成人看護学領域における同 Semester 開催の他科目において関連性を持たせながら、学修する機会を設定し、科目間相互において補完的な連携を図ることができた。多様な状況に柔軟な対応ができるよう、今後も組織的で迅速な教育支援体制を整える姿勢が必要であると考えられる。

2. 今後の課題と展望

今回、第3回から実施した課題の取り組みにおいては、その実施内容に今後の課題が残された。学生は本科目で看護過程に関する知識を学び、既習の知識からさらに新たな知識を修得する内化の過程を経て、これらの知識を活用した外化としてのプロセスを看護過程の分析を通して行ったが、このプロセスにおいてグループ学修の効果的な活用が十分できなかったと考えるためである。本来、この演

習では従来案として協働学修を企画していたことから、遠隔授業を行わざるを得ない状況にあってもこのようなグループ学修を取り入れていく工夫は必要であると考えられる。それには、今回使用した LMS や LMS 内の掲示板に加え、チャットやグループごとのビデオ会議システムも有用であるし、プレゼンテーションも可能であると考えられる。これらを成功させるためには、必要な人材の確保とともに、教員の遠隔授業に関する技術の習熟度を高め、教育力を上げるための研鑽も必要である。

VI. おわりに

今般の世界規模あるいは本邦における新型コロナウイルス感染症の拡大はいまだ収束の兆しがみえず、完全な面接授業の再開について先行きが見通せない中、今後もインターネット通信に依った遠隔授業の活用が求められるであろう。しかし、このような状況を大学教育の改革の契機として前向きに受け止め、さらに積極的な ICT ツールの活用を推進し、遠隔授業のより効果的な活用方法や新しい授業の在り方を模索する必要がある。それは新しい教育を見出し、発展させることにつながる。今回の経験を次に活かしたい。

文献

文化庁 (2020): 令和 2 年度における授業目的公衆送信補償金の無償認可について, https://www.bunka.go.jp/koho_hodo_oshirase/hodohappyo/pdf/2020042401_01.pdf (2020.11.30).

E.F.Barkley, K.P.Cross, C.H.Major (2005): Collaborative Learning Techniques: A Handbook for College Faculty. 安永悟監訳 (2017), 協働学習の手引き, ナカニシヤ出版, 京都.

開原成允, 篠原信夫 (2012): 遠隔授業シス

テムとインターネットによる e ラーニングとの融合ー理想の社会人教育システムをめざしてー, 国際医療福祉大学学会誌, 17 (2), 1-10.

小池浩子 (2002): 遠隔授業の抱える課題と効果的授業方法ー教員のコミュニケーション能力の役割ー, 信州大学教育学部紀要, 105, 85-96.

文部科学省 (2020): 令和 2 年度における大学等の授業の開始等について (通知), https://www.mext.go.jp/content/20200324-mxt_kouhou01-000004520_4.pdf (2020.11.30).

文部科学省 (2020): 新型コロナウイルス感染症対策に関する大学等の対応状況について, https://www.mext.go.jp/content/20200424-mxt_kouhou01-000004520_10.pdf (2020.11.30).

文部科学省 (2020): 新型コロナウイルス感染症の状況をふまえた大学等の授業の実施状況, https://www.mext.go.jp/content/20200527-mxt_kouhou01-000004520_3.pdf (2020.11.30).